

淨土

1992-11

昭和二十四年四月二十八日
平成四年十月二十五日印刷
第五十八卷

十一月号

(運輸省 特別坑承認雜誌) 第三十五号
平成四年十一月一日発行





十一月の秀句

晩秋の水に色あり深さあり

小寺正三

晩秋の池心釣舟の影坐る

水原秋桜子

晩秋の塀の尽きたる独り言

木村茂尾

|| 十一月号 ||



心にはあみだほとけ、たすけ給へ
とおもひて、口には南無阿弥陀仏
と唱るを、三心具足の名号と申也。

『つねに仰せられける御詞』

目 次

法 話

いのちの帰趣 坂 野 泰 巨 (8)

にこにこ法話

新宗教が怖い! 長谷川 岱 潤 (10)

《読者のページ》

法然上人行状絵図は
やはり勅修であるの説 (上) 河 玄 (17)

“維持会員”へのご加入のお願い (9)

季語やぶにらみ (28)

..... 木 下 隆 一 (26)

空 蟬 考

表紙絵 小林治郎画

いのちの帰趣



生死の家には疑いをもって所止となし、
涅槃の城には信をもって能入となす。

— 選択集第八 —

坂^{さか}
野^の
泰^{たい}
巨^{きよ}

(大正大学講師)

「生命は地球より重い」といいます。
いま、その生命（いのち）の論議がさかん
におこなわれています。いのちとは生死のこ
とです。私たちは、この世に生まれ、この世

に生き、そして死んでいくのです。

私たちはこの世にいのちをいただき、いまここに生かされていることはわかっているのですが、なぜか生まれたときのことは知らないのです。やがて死を迎えるときがくるが、だれしも自分自身の死を体験することはできないのです。考えてみれば、まことに不思議なことがあります。

このように、自分ではどうにもならない「いのち」を、自分の思い通りにしようとしているのが私たち人間なのです。

法然上人は選択集のなかで、

私たちが、生死をくり返して迷いと苦しみの世界にいつまでも止どまっているの

は、つねに疑いの心を持ち、物事の真理が信じられないからである。だから、迷いと苦しみを超えた仏の教えを信じるこそこそ、私たちを救ってくださる真の安らぎの世界に入る手だてとなる。

と説いておられます。

疑いをもっているあいだは迷っているということであり、なかなか真実にめざめられないということなのです。人間に生まれても、貪り・怒り・愚痴によって、生死の迷いや苦しみをくり返すだけではまことに空しいことです。真実の教えにしたがった修行によってこそ、さとりの世界に生まれ変わることができるといのが仏の教えであります。

私たちはこの世に人間として生まれさせて
いただきましたが、ただそれだけで終わって
しまったのでは、何のために生まれ、何のた
めに生きているかということになりかねませ
ん。

いつ死んでも不思議ではないこの私が、真
実にめざめ、仏の国土に生まれさせていただ
くことこそ、人生の意義があるというものだ
す。

私たちはよく旅行をすることがあります。
それも帰るところがあるから、安心して楽し
い旅ができるのですね。それと同じで人生も
旅であるといわれています。人生の帰趣、そ
れはどこでしょうか。仏の国土、お浄土であ

ります。

法然上人は阿弥陀仏の教え、易行易修のお
念仏をお示しく下さいました。

現世をすぐべきようは 念仏の申されん
かたによりてすぐべし

お念仏の申されるようにすごしなさい、と
いうのです。さらに、

衣食住の三は念仏の助業なり

私たちは、衣食住が生活の中心であるかの
ごとく考えていますが、衣食住はお念仏をと
なえるためのたすけとなるものであるとおっ

しゃっておられます。すなわち、お念仏が主人であり、衣食住は客人としての生活でなければならぬのです。私たちは、こここのころが間違いやすいのです。

私たちがこの世に生まれたことは偶然でも、死ぬことは必然であります。元氣なあいだは、死を遠くへ追いやってはいませんか。生きていることは「あたりまえ」と思っていないでしようか。それは、「いのち」を軽視し粗末にしていることでもあります。

いま脳死と臓器移植・尊厳死・人工受精・代理母・墮胎・遺伝子操作・ターミナルケア・ホスピスなど、宗教者の対応が迫られています。みな、いのちの問題であります。

そういうなかで、死の概念が変わろうとし

ていますし、広い意味では生命の倫理が問われているときです。

私たちも自分自身の一大事として、さまざまな面から考えておかなければならないと思います。

いのちを考えるうえで、もう一つ重大な問題があります。

数カ月前のことです。日本青年会議所の宗教部会からこんな手紙が届きました。「いただきます運動」を展開しようというのです。

まずは、その一端をご披露いたしますと、

私たちは「グルメ時代」の到来とともに、飽食の世界へどつぷりと足を踏み入れて

しました。食事ということに対して
ぜいたくのかぎりをつくしています。例
えば、日本だけでも年間一〇〇〇万トン
の食物を単なるゴミとして捨てているの
です。一方、他国では、子供に食べ物を
与えられずに餓死しているというのも現
実です。この同じ時代にです。これは、
われわれが自分の手を汚さずに、食べ物
を手に入れることができるといったこと
も、一つの原因になっているのではない
でしょうか。牛肉も、豚肉も、鳥肉も、
魚介類などすべての食物が、スーパーな
ど店先に並んでいる製品としての状態で
しか見ていないのです。しかしそれらは、
みなわれわれと同じく「生命」が宿って

いた生き物に間違いはないのです。「私
はベジタリアンだから、そんな話は関係
ない」という人もあろうが、野菜や果物
も例外ではないのです。

もし、われわれが肉を食べるとき、その
動物の命を断ち、皮を剥ぎ、肉を捌き、
というように自分の手でおこなったらど
うでしょうか。命の尊き、食物の有難さ
が心に渗みるのではないでしょうか。わ
れわれ人間は、人間以外の生物の「いの
ち」を糧にして、自分の明日の命を支え
ているのです。つまり、「いのち」を「い
ただいている」のです……。

といった内容であります。

私たちは、あらゆる生き物のいのちを奪って生かされているのです。それなのに、その食べ物を無駄にし、たくさんのごみを出しているのです。飽食に麻痺してしまい、自分たちのしていることが「あたりまえ」になってしまっているのではないのでしょうか。

生き物を食べてはいけないというのではありません。必要量をわきまえて食するのはやむをえないということです。

○ぼくたちは 生きものを 何びき殺すやら

○虫ふんで 思わず口に 念仏が

○凡夫 わが命わすれて 畜生の生命とる

○凡夫の犯した罪は みんなみ仏の顔よごし

○「ぼくたちが生きているのは、なんのおか

げか」ということです。もちろん仏さまがまもってくださるおかげですが、もう一つ忘れてならないのは、ぼくたちが人でないものの命をとって、それから栄養をとって生きていることです。食べることは限りません。いま着ている服も綿や麻の命をとって作っているのです。ぼくたちは人間に生まれ、お念仏の日暮しができることをよろこばなければなりません。

これらは、『小さな妙好人』（三木恵照編・永田文昌堂）にでていた小学生の書いたものです。

さらに『幼時の法話』（真宗佐賀保育連盟）のカレンダーからは、

おさかなさん／おやさいさん／とうとい
いのちを／ありがとう。

いただきます／ごちそうさま／いのちを
もらって／ありがとう。

というすばらしいことばに出会いました。

雑阿含經には、『四人の妻』のたとえがあり
ますように、日ごろ最も大切に行っているも
のは、自分の「身体」であります。第二には
「財産・地位」をうるために苦勞し、第三に
は「家族・友人」、そして第四には自分の「心」
という順になっています。しかし、最後まで
自分についてきてくれるのは、心だけである

ことに気づかず、貪・瞋・痴にまかせて心を
ほったらかしにしているのです。

私たちは、なぜ生死をくり返す迷いの世界
から離れ出ることができないのでしょうか。
みな三毒煩惱によってつくった無量無辺の煩
惱業苦のためであります。それによって、た
だいたずらに年月をすごしても、たとえ長生
きをしたとしても、決して生死を出離できま
せん。

どうか、自分の思い通りに生きようとする
のではなく、南無阿弥陀仏におまかせをし、
心に南無阿弥陀仏をただけば、必ずすばら
しい世界がひらけてきます。

◎“維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

新宗教が怖い！

長谷川 岱潤 はせがわ たいじゆん
(東京・品川区戒法寺住職)

「おとうさん、このカレンダー十月のと

ころに神無月って書いてあるけど、これなあに」

「昔の月の呼び方だよ」

「それは知ってるけどさ、何て読むの、かみなしづきでいいの」

「そうじゃないよ、かななづきって読むんだよ」

「十月は神様がいないの」

「どうもそうらしいよ」

「いないって、どこ行っちゃうのよ」

「神話によれば日本中の神様は、この時期出雲に集まるんだそうだよ」

「出雲ってどこ」

「島根県の出雲大社があるところさ」

「集まって何するの」

「それがおもしろいんだ。全国各地から集まってきた神様は、各自地元からそろそろ結婚させたいと神様が思う人や、結婚したくて神様にお願している人の名簿を、それぞれが持つてくるのさ。そしてね、十一日から十七日の七日間に、持ち寄った名簿を照らし合わせ、この人とこの人、この人とこの人、というふうに会議をして決めてゆくそうさ。そこで決定された者だけが、それから一年の間に結婚できるんだそうさ。もしそこであふれて決まらなかったりすると、また来年に持ち越されてしまうのだそうだよ」

「それで出雲大社は、縁結びの神様って言われているのね」

隣で聞いていたお母さんが、思わず口

をはさみました。

「それじゃ昔の人はみんな、神様が結婚相手を決めてくれると思っていたのかな。だったら今年の夏の話題になった、統一協会の合同結婚式なんか、現代出雲版だね」

ミーちゃんが得意げに言いました。

「あれは違うよ。出雲の神様は神話の世界だよ。出雲の神様が決めたと言っても、現実には自分の結婚相手は、自分たちかもしれないが親どうしが決めているよね。そういう現実的出会いがあり、いよいよその結婚がまとまったあとに、自分たちの判断を越えた、神様のお墨付きがあるとして、その結婚を一層意味深いものと位置付けたのさ」

「統一教会の合同結婚式は、神様が相手の人を決めてくれたって、歌手の人言ってたよ」

「その人にとっては、その教祖が神様かもしれないけれど、結婚を挙げる相手の決め方としてね、すべて神様である教祖任せにして、教祖にすべて選んでもらうというのは、それまでの自分の人格も人間性もまったく関係なく、ただそこで出会ったと言うだけの選択だよ。それに比べ、たとえ神様が会わしてくれたと信じたとしても、自分かまたは親が決めた後で、神様が祝福してくれていると思うことは全然違うんじゃないかな」

「そりゃそうよ。統一教会って、親は教祖様で、本当の親はサタン、悪魔なんて

言うんですもの」

お母さんが、少し怒ったように言いました。

「人間にとって結婚って、とっても大事なことだよ。でもその結婚によってそれまでの自分の生活をだめにしてしまったり、親を不幸にしてしまうようでは、決して幸せな結婚とは言えないよね。結婚は私たちが幸せになることが目的で、決して神様への使命ではないはずだよ。それに人間は出会いで人生が変わると言うけれど、出会いはその人の人格が決めるって、どこかで聞いたような気がするんだ」

「私たちが一生懸命生きていることを、仏様を守ってくれていると私は信じてい

ます。それにお父さんと出会えたことも、
仏様のお陰と思っています。でもね、統
一教会の合同結婚式のようなこととは、
全然違うと思うのよね」

お母さんは、言葉に困りながらもミ
ちゃんに訴えたい一心で言いました。

「そうねえ。つつい神様が決めるとか
何とかって、神様なんて言われると、宗
教ってみんな同じかな、なんて思っ
てしまふのよね」

「そうか。神様とか仏様とか、何とか教
会なんて言われると、みんな宗教の世界
だから一緒に思えてしまふだね。これは
怖いことだね。そしてとても困ったこと
だね」

「そうですよ。それでなくても今の日本

には変な宗教が多くて、わけの解らない
平成の神様なんてものが、よくテレビに
出ているじゃないですか」

「宗教法人になることが比較的簡単だか
ら、税金逃れじゃないだろうけど、聞い
たことも無い教団がたくさんあるみたい
だね。その全てがいわゆるインチキとま
では言いきれないだろうけれど、宗教と
いうよりもむしろオカルトと呼んだほう
がよいものや、中にはオカルトにも属さ
ない政治団体と区別がつかないような、
秘密結社のようなものもあるからねえ」
「オカルトってなあに」

「神秘的なことや、超自然的なことを信
じるだけのものさ。よくあるじゃない、
霊視だとか、霊力だとか言って、そうし

たことを信じることを主に行っている団体。
あれは宗教じゃないよ」

「でもキリスト教だって、処女マリアの
懐胎なんて、超自然的なことを言ってい
るんじゃないの」

「そりゃ宗教には神秘的なところだつて
あるさ。でもそれを売り物にはしていな
いよ。その神秘さを崇拜しているわけ
はないってことさ。それにさっき言った
霊視を売り物にしている仏教系の新教団、
しょっちゅう新聞に宣伝のビラが入って
いる団体だけど、テレホン相談ではこの
教団の苦情が一番多いそうだよ」

「日本人はこの神秘的と言うか、宗教的
なことにとつても弱いのだ。宗教は嫌い
だなんと言う人は多いけれど、宗教的な

ことは粗末にできないと言うか、おろそ
かにしないと言うのか、何か、うまい言
葉に引つかかってしまう人が多いのよ」
「それにむしろ、宗教なんてまったく興
味がありませんなんて言っているインテ
リな人ほど、つまらないインチキ新宗教
に、だまされちゃったりしているよう
なんだよね」

「宗教との出会いも、人を変えるよね」
「そうだよ、日本人は安易に考えている
けれど、これが一番大事な出会いなんだ
よね。たとえば、結婚相手が変わる宗教を
信じていたりしたら、そりゃもう大変な
ことさ。そこまで人間を見ておつき合い
しないと、親戚つき合いさへできなくな
ってしまう例はたくさんあるよ」

「お檀家さんの子で、この間統一教会に入られそうになった話がありましたよね」

「そうそう、あれはぎりぎりだったよね。もうちょっとでアメリカのマグロ漁船に乗せられそうだったものね。親御さんから電話があったから何とか助けられたけど。そういうことって、多いのかもしれないね」

「お父さんの役目ですよ。うちのお檀家さんの家族を守るのは」

「そうだねえ。お寺の住職がだらしないから新宗教がはやり、壺や多宝塔なんか買わされる人が出ちゃうのだからね。みんな住職の責任かもしれないね」

「ミーちゃんも、お友達とおつき合います

る時も、お相手のお母さんが変な宗教信じていたら、すぐ話してね」

「そうね、でも大丈夫よ。私、ちゃんと仏様信じているから、反対によく仏様のお話し聞かせてあげるわよ」

「そりゃたのしいや。我々が避けたり、逃げたりしては絶対にだめだよ。堂々としていることが一番大事なんだよ」

「おとうさん、私、新宗教って怖くなってきたわ」

「お母さんが、そんなこと言ってどうするんだ。でも確かにすごい勧誘をする人がいることも事実だからね。しかし私たちにはお念仏があるじゃないか。怖くなくなったらお念仏を唱えなさいよ」

「そうですね。ありがたいです」

好評

法然上人

浄土三部経講説

B6判五四二頁
価四、五〇〇円

法然上人撰述の無量寿経釈、観無量寿経釈、阿弥陀経釈の原典を訓読註解して和訳し、更に和字三経釈の原典を註解和訳したものを加え、本宗所依の経典に対する宗祖の明解な義解を記す

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳 浄土三部経

B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人

選択集

B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師

観経四帖疏

B6判五八四頁
価四、五〇〇円

和訳 善導大師

六時礼讃

B6判二六五頁
価二、四〇〇円

○原典を訓読註解の四聖典
○本書でお申込下さい。代金（送料実費）は後払（振替用紙同封）

訳と編 村瀬 秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番

法然上人行状絵図は
やはり勅修であるの説（上）



河^{かわ} 住^{ずみ} 玄^{げん}

（一） 従来の勅修説

法然上人には伝記がたくさん作られている。その中で最もすぐれているのは原本が京都の知恩院に蔵されて、国宝に指定され、古来舜昌法印の撰といわれている。

る「法然上人行状絵図四十八巻」である。一般には略して「勅修御伝」とか「四十八巻伝」とか呼ばれて、普及している。

（以下「御伝」と称する）。

その「勅修御伝」と呼ばれるいわれは、鎌倉時代の末期、舜昌法印が後伏見上皇

の勅命で編集したからであるという。この説は中世の室町時代にはなく、近世の江戸時代になって、宣伝された。

徳川将軍家は三河念仏の中心地、岡崎の大樹寺の檀那であったので、特別に浄土宗を保護した。江戸の増上寺が関東十八檀林の首座、僧録所として一宗を統制したり、京都の知恩院に宮門跡、法親王が宣下せられたのもそのためである。自然、法然上人尊宗が昂揚し、元禄十年（1697）円光大師号の勅諡に始まり、五十年ごとに大師号が御下賜となった。元禄十三年（1700）には「円光大師伝」と題して、御伝が出版、宝永元年（1717

14）には「円光大師御伝翼賛六十巻」が出版された。そして享保二年（1717）に法然院の忍激がその著「吉水円光大師御伝縁起」に「勅修」の二字を冠して出版した。その勅修の顛末を次のように書いてある。

爰に後伏見上皇、本より大師の徳行を御信仰ましましけるが、叡慮もかたじけなく、上への道跡より、弘教の門弟、帰依の君臣等の行状に至るまで一部の実録となし、万代の龜鑑にそなへまうすべき旨、舜昌法印に仰せ下さる。法印つつしみ承りて、近代杜撰の濫述をば択びすて、ただ門人旧記の実録をの

み取り用いて、類聚して編をなせり。

およそ二百三十七段、段ごとに画図を

あらはし、巻を四十八軸にととのへて、
奏進せらる。上皇、叡感のかぎりなく、

更に方臣に命じて事実を校正し、文章
を潤色せしめ、絵所に仰せて、くわし
く丹青の相を成し給ふ。

と書いて、更になお「しかのみならず」

として、上皇を始め、天皇・法皇・公卿
の方々が、巻々を分担して染筆繕写した
もうたことが誌されてある。判りやすく
表示する。

後伏見上皇 1 2 3 7 8 の五巻
後二條天皇 14 15 22 25 26 33

34 35 36 37 38 39 42 の十三巻

伏見法皇 40 の一卷

尊円法親王 9 10 11 12 13 18 30
の七巻

三條実重公 31 の一卷

姉小路済氏卿 16 17 24 27 28 29 32

41 43 44 45 46 47 48 の十四巻

世尊寺行尹卿 4 5 6 21 23 の五巻

世尊寺定成卿 19 20 の二巻

忍濃のこの御伝勅修説は宗門で公認され、
爾来定説となつて近代に及んでいる。

それでは忍濃は、古来舜昌法印撰とい
われてきた御伝に対して、成立すでに四
百年を経過して、何を根拠にして各巻の

染筆繕写の氏名まで、詳細にわたって後
伏見上皇の勅修であることを知り得たの
であろうかが問題になる。

大正十三年、中外出版社刊、藤堂祐範
・江藤澁英の「大正新校・法然上人行状
絵図」の巻首に、道恕僧正編の目録が附
録してある。凡例に「知恩院本に附属せ
る」とあるから、原本は知恩院の宝蔵で
ある。その奥書に、

宝永第五戊子初春中浣 東大寺別当兼
華嚴宗長吏 安井門主 前大僧正道恕
花押 書之

とあって偉い立派な高位要職の道恕であ
る。宝永五年(1708)は忍澁の御伝縁

起出版の九年前である。この道恕僧正編
の目録に、御伝四十八巻、毎巻染筆書写
の氏名が記載されており、しかもそれが、
縁起のそれと全く同じであるところ、即
ち忍澁はこの知恩院蔵の道恕の目録に拠
って、書きうつしたのであることが判つ
た。

しからば、道恕は何を根拠にして知り
得たかが、また問題になる。「東大寺別当、
華嚴宗長吏、安井門主、大僧正」なる高
位要職の人が他宗の浄土宗の総本山知恩
院に駕を枉げて来臨して、法然上人伝の
絵巻物を一軸一軸繙いて、その書写者の
氏名の鑑定をしたことじたいが不思議で

ある。(鷲尾順敬編、増訂日本佛教人名辞典には道恕は「真言宗・東寺長者」とある)。

御伝の勅修説は、忍濃の「御伝縁起」の外に「円光大師行状画図翼賛」の序文に元禄十六年(1703)義山良照が次のように書いている(原漢文)。

一日、予、智(法弟の中阿円智)ヲ引イテ
先師(聞證良光)ヲ洛シ淨教(京都市下京区
四条下ル多聞山淨教寺)ニ訪フ。師欣然
トシテ談話シ、開祖ノ事ニ及ブ。師云
ハク 四十八軸ノ全伝ハ吉水大師一化
ノ顛末ニシテ山門ノ法印舜昌ノ編スル
所ナリ。初メ昌師偏ク諸家ノ旧記ヲ攬

リ、編シテ一套トナシ、画図ヲ附入ス。
述作スデニ成リ、櫃ニヲサメテ自テ珍
トス。ノチ恭シク後伏見上皇ノ勅ヲ承
ケテ之ヲ奉進ス。天覽段重、睿信殊ニ
深シ。乃チ菅(原)清(原)ノ諸儒オヨビ
命世ノ方臣ニ詔シテ、之ヲ添ヘ之ヲ剛
リ、斐然トシテ章ヲナセリ。是ニ於イ
テ伏見・後伏見・後二條ノ三帝、親シ
ク震翰ヲ染メタマヒ法親王尊円モ勅ニ
ヨリテ華毫ヲ挺スタマフ。マタ一時ノ
搢紳、転法輪太政大臣実重等ニ命ジテ
繕写シ、全備セシメタマフ。ソノ画図
ハ画司土佐某勅ニヨリテ筆ス。実ニコ
レ淨家ノ美玉ニシテ、末葉ノ水鑑ナリ。

と聞證良光が門弟の義山・中阿に語ったと談として書かれてある。聞證は名越派大沢流の袋中良定—東暉良閑—聞證良光と師資嗣法した学僧で、貞享五年（1688）五月二十七日、五十四歳で寂しているから、この談話は、道恕の染筆者鑑定前二十年、忍激の御伝縁起出版前三十年以上先立っている。

以上が自分の御伝勅修説の発祥を遡り得た上限である。

（二）勅修説が疑われる理由

御伝の成立時期について、忍激の御伝縁起に「徳治二年（1307）に初まり、

十年あまりの春秋を経て、其功悉く成就し給ひぬ」とあるが、恐らく宗祖上人の一百回遠忌（応長元年（1311））を期して、編輯が進められていたのであらうと推量される。勅修説は江戸時代の貞享・元禄期に提唱されたとすると、中間四百年の空白を隔てているから、疑えば疑う余地は多分にある。

まずその上限とした翼賛の序文に、義山がその師聞證の談話として書いている記事の真偽である。義山はすぐれた学僧であった。彼は宗祖法然上人に絶対の尊崇を捧げ、知恩院蔵の塔頭の信入院に住して、門跡尊統法親王・門主白誓秀道和

尚から篤く信頼されていた。元禄十年（1697）宗祖に円光大師の勅諭号が御下賜になったのも、彼の発願であつたと想われる。元禄十三年（1700）には円光大師伝二十四冊を刊版し、宝永元年（1724）には円光大師行状翼賛六十巻を完成・刊版している。しかしその宗祖顕彰の至誠は度を踰して、過失を犯す場合もあつた。その一例は「黒谷上人漢語燈録」の改竄である。御伝の勅修説も彼の發案で聞證の談話も道恕の鑑定もあるいは擬作虚構にかかるものではあるまいかの疑いが持たれる。

さらに確実な理由としては、舜昌法印

の著書「述懷鈔」の改竄がある。この書は舜昌が山門（延暦寺）の衆徒から舜昌は天台僧でありながら他宗の法然房の伝記を書く不法を非難されたのに対する釈明の書である。中国・日本の天台宗の祖師たちの浄土信仰の先例を列举し、ついで自己の御伝編述の事に及んでいる。しかし、後伏見上皇の勅命を受けたとは書いてないのである。

というと続浄土全書卷四収載の「述懷鈔」十五頁を持ち出して、

今 不 図 勅命ヲウケ 法然上人ノ
勸化ヲ画図ニ写シ 弥陀称名ノ本願ヲ
卷軸ニ顯ハス。

と、はっきり書いてあるではないかと示される人もあろう。ごもつとも確かに「勅命ヲウケ」と書かれてあるが、この続浄全所収の「述懐鈔」は、延享五年（1748）版の述懐鈔で、それより七十三年前の延宝三年（1676）の述懐鈔にはこの部分が、

然ル間 法然上人ノ勸化ヲ画図ニ乗セ
弥陀称名ノ利益ヲ卷軸ニ顕ハス。

とあって「勅命ヲウケ」の文字はないのである。（自分にこの事実を教えてくれたのは「日本歴史」150号に掲載の大橋俊雄氏の「四十八巻伝の成立年時に就いて」の記事である。記して感謝申します。）

どうして延宝版本と延享版本とで、このように本文が相異しているのかを考えてみるに、この両版の中間に、義山が宗祖顯彰に努力活躍した元禄期が挟まれている。よつてこの間において述懐鈔の本文の記事が、勅修説に改竄されたのである。誰氏が改竄したかは不明であるが、多分に義山の意向が働いていることは想像される。これが勅修説が後世江戸時代の附会と疑われる理由である。

もつとも舜昌法印が「述懐鈔」を書いた由来の山門衆徒の非難は、御伝に対してではなく御伝の草稿本の「法然上人伝記」（九巻伝）に対してであつたとすれば、

勅修説とは関係がなくなる。

さらに現代になって、道恕の目録・忍
激の縁起に書いてある御伝を染書繕写し
た皇族四名、公卿四名の氏名が抹削され
るに至った。それは昭和五十六年中央公
論社から知恩院所蔵の御伝の原本を写真
複製して、続日本絵巻大成123「法然
上人絵伝」と題して上中下三冊が出版さ
れた。その下冊に小松茂美氏が解説を書
いている。非常に精細綿密な考証をして、
御伝を書写した人々を鑑定している。長
文なので要点を抄録すると、

道恕の目録に示された筆者鑑定が、何
に基づいてなされたものか、皆目見当

もつかない(第三章・絵と詞書の伝称筆者
149頁)。安井門跡道恕は、何に基づい
て目録を作ったか、また忍激が縁起に
述べる徳治二年云々は、何を援用した
ものなのか。ただ私がこの煩瑣な作業
を通して探し当てたのは、詞書の清書
に参加した同勢は十七人というに過ぎ
なかった。

小松氏のこの鑑定は、直接御伝の勅修
説を否定しているのではないが、皇族・
公卿の染筆繕写でないとすると、ひいて
は勅修説までを疑うようになることが懸
念される。

(つづく)

季語やぶにらみ (三)

空蟬考

空蟬になにゆゑ蜂の来て止まる

この句を作つて一年余が経つ。全くの囑目吟で、この句が残つたのは私の俳句作法からいへば異例のことであつた。というのは、句が浮かんだら直ぐメモしておきなさいと人には奨めるが、自分では実行したことがないか

木きの
下した
隆りゆう
一いち

(隨筆家)

らである。吟行に出ても句帖もカメラも持たない。目に映つた事物を記憶にとどめ、その中から取捨選択して季語を決め、夜中ひと眠りした後起き出して作る。これが私の俳句作法なのである。

俳句というやつは時と所を選ばず不意にやつてくるから、十中八九はメモすることは不

可能といつていい。では覚えておいて後でメモすればと思われるかも知れないが、例えば電車の中で浮かんだ一句を後生大事に持ち帰ろうとしても、他のものに気を取られた途端、その句はきれいさっぱり頭の中から消え去ってしまうのである。この他のものというのが曲者で、今の季節であれば冷房の効き過ぎであつたり、子供の泣き声や電車の急停車、強烈な香水の匂い、他人との接触……と枚挙にいとまがないが、足の位置をちよつとずらしただけで、句が消えた苦い経験を私は持っている。こうして雲散霧消した幻の名句？は、潜在意識としては残っているのかも知れないが、最初現れた時の形そのままに姿を現すことは二度とない。句との出会いも別れも一期一会であつて、長く記憶にとどめ得る句は自

作においてもその数は極めて少ない。

句歴を聞かれると、私は一応「中学四年の時から」と答えることにしているが、内心いささか忸怩たるものがある。今の学制でいえば高校一年の時から卒業までの三年間、広島県の三原市で、友人の父親が主宰する「春星社」という結社に属して俳句の手ほどきを受けたが、その後約三〇年間のブランクがあるからである。

師は松本正氣といつて青木月斗門の俊秀で、一家言持つ人であつたが、いわゆる流儀にこだわる人ではなく、弟子には自由な句作を奨励した。「型に嵌めてどうなるというの」が口癖だった。「余計なことを考える暇があつたら、数多く作つて自分の句を磨け！」とも言つた。そんな立派な師の許にしながら、弟

子は甚だだらしがなかった。ブランクの原因は、父親の転勤で高校卒業と同時に東京へ移ったのと、大学二年の時、父が地方に転勤になり、下宿生活を始めたことによる。それまでは辛うじて俳誌「春星」とは付かず離れずの状態が保たれていたが、独り暮らしの安易な生活に慣れると、月々の投句は怠りがちとなり、二、三か月もさぼると段々敷居が高くなって、そのうちとうとう敷居は鴨居に達して入れなくなってしまった。ご無沙汰しましたと挨拶して入って行けば何でもなかったのであろうが、それが出来ぬうちに気がつけば三〇年という歳月が流れていたのである。「春星」に戻るきっかけを作ってくれたのは、以前本誌に書いた「小砂利の山」という随想で、この中に「春星」に触れた部分があったので、

「書かせて頂きました」と友人宛に一部贈ると、「戻っておいで」と折り返し赦免状が送られて来た。師は門を閉ざすことなく、ずっと私の帰りを待っていて下さったのである。私が本格的に句作を始めたのはそれから、実年数は手ほどきを受けた期間を含めても、ただか一五年足らずなのである。

空蟬を発見したのは、玄関のポーチに置いた、留守中郵便物や新聞を入れて貰っている茶箱に腰掛けて煙草を喫っている時であった。我が家は傾斜地に建っているので、ポーチから更に十数段、木の階段を降りなければ地上に出られない構造になっており、ポーチは二方を木柵で仕切っているが、その一方には目塞ぎ用にヤマモモを一本植え込んである。茶箱のそばには灰皿と水を張った小さいポウル

が置かれているが、このボウル、以前は遊びに来る近所の犬のために置いたものだったが、今は煙草の火を消すために使っている。どれもこれも、凡そ玄関先には似つかわしくない道具立だが、ここは私の喫煙所であるから、この三点セットは私にとつては必需品なのである。夏は風が通つて涼しいが、冬はかなり寒風が身にしみる。しかし、いつの間にか嫌煙家に変身した家人に気兼ねしないで煙草に親しめるのだから、贅沢は言つていられない。その日も午後のひととき、私はここで寛いでいた。二本目の煙草に火をつけた時、一匹の足長蜂がヤマモモの一個所へ向かつて、執拗に攻撃的な飛び方をしているのに気づいた。よく見ると、蜂は蟬の脱け殻に攻撃を仕掛けているのだ。いや、そう思つたのは私の早ト

チリで、蜂は蟬の脱け殻に興味をそそられただけだったのかも知れない。

（それにしても新品の脱け殻だな。とすると、これは今鳴いているひでりし 蟬の殻か？）

やがて蜂は脱け殻に取り付くと、嘗めるように顎を動かし始めた。

（蟬の脱け殻が蜂の好物とは知らなかったな。それとも巣を作るのに必要な成分でも含まれているのかな。うん、そうに違いない。）しかし、そう思つたのも私の早トチリであつた。蜂は二、三分そんな動作を繰り返していたが、飛び去つた後脱け殻を調べてみると、齧られた形跡はどこにもなかった。蜂の行動は不可解だったが、不可解は不可解として、

空蟬になにゆゑ蜂の来て止まる

と私は詠んだ。後に句友の一人が「この間に解答は不要。何故ならこれは理科・科学の目ではなく、俳句の目だから」と評してくれたが、久し振りに素直な気持ちで詠めた句だったことだけは確かだ。私は大急ぎで煙草を消すと二階の書斎へ駆け上がり、有り合わせの紙に句を認めた。たまたま玄関のドアが開いていたのが幸いした。もし閉っていたら調子の悪いノブに氣を取られている隙に、句を破壊するウィルスが侵入して来ないとも限らなかったからである。しかし、偶然とはいえ、なぜ私は今まで一句も作つたことがない空蟬の句を作ってしまったのであろうか。この疑念が晴れるには、なお暫く時間が必要だった。

「空蟬」という語は、学生時代テキストと

して読まされた「源氏物語」の第三帖の名で知っているが、前帖「帚木」の後半を受けて、光源氏一七歳の夏、人妻に懸想して果たせず、「空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」という歌を贈ったのがこの帖の名の由来で、この帖は後に新たに書き加えられたようで、作者も紫式部であるかどうか疑わしいという説が妙に鮮烈に記憶に残っているだけで、話の筋そのものはよく覚えていない。

辞書類の記述を総合すると、この世に生きている人を表す「うつしおみ(現臣)」が「うつそみ」「うつせみ」と変化し、更に「現世・この世・人の世」に意味領域を広げたと説明している。万葉集などに音だけを借りて「虚蟬・空蟬」と表記したことから、本来の意味の

他に「蟬そのもの」「蟬の脱け殻」「魂が抜け去ったさま、虚脱状態」をも意味するようになったという。これが仏教の無常観と結びついて「はかないこの世」を表すようになったのは仏教が広がりを見せた平安時代後期以後のこと、特に鎌倉文学に与えた影響は大きい。また「うつせみの」は、「むなしい」という意から「命・人・身・世・むなしい」などにかかる枕詞にもなっている。

「日本大歳時記」で詩人の大岡信氏は、西東三鬼の「岩に爪たてて空蟬泥まみれ」の句を挙げて、「(前略) 蟬のぬけがらのあの背中がぱっくり割れている形からくる感じも加わってか、多くの「空蟬」の句には、現世のむなしさの思いを蟬の脱け殻に託して諷詠する傾向があるように見える。情感がつきまとう

季語に内在するそういう性質を、あざやかに具象化して見せた。」と評しているが、「情感のつきまとう季語」とは、言い得て妙である。

私の所へ師の計報が届いたのは、亡くなってから半月も経った去年の八月末のことであった。逝去の報に参集した弟子達が手分けして地方の同人に電話したそうだが、手違いで私の所へはかかって来なかった。混乱し、恐慌状態に陥っていたのであろう。八月一四日が忌日であるが、もう少し涼しくなったら見舞いに参上しなければと考えていた矢先の計報だったから、ショックは大きかった。

春の夜の夢かうつつか米寿吟

老の春下手な句叱る仕事持つ

我が書いて我が読めぬ句や花の酔

五月鯉雲吞み尽し空青し

(米寿自賛) 揚花火八十八に開きけり

みやびなる八十八の花火哉

待つといふ楽しさを持つ夜食かな

「春星」誌上で、こういった老いを感じさせぬ句に接していたためについて惑わされて、私は時宜を逸してしまったのである。報せを受けた時、なぜか私は前出の空蟬の句に思いを馳せていた。空蟬は師で、空蟬にすがっていた蜂は私であったかと……。全くの囑目吟で、決して意図的に作った句ではなかったが、結果的にはそういうことになる。よく靈感が働くという言葉^を耳にするが、私は自分自身に靈感があるとは思わない。しかし、「空蟬」という季語^が何のためらいもなく頭に浮かび、

一句が何の苦もなく出来上がったのは、靈感の導きとしか言いようがないのである。

師の晩年は膀胱腫瘍の摘出、人工膀胱の装着等々、病氣との戦いに終始した。直接の死因は肺気腫による呼吸不全であったが、数か月前までは酸素吸入管を鼻に突っ込んで、月二回句会を開いて弟子を叱咤激励していたという。そんな気丈な師であったが、最期は御仏におすがりした大往生であった。

俳誌「春星」主宰松本正氣師享年八八。

心経に力を借りて涼しくす

辞世の句である。

(この稿終り)

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字詰用紙六―十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十八巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年十月二十五日 印刷

平成四年十一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 (株)小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三六二)五九四四

〒〇三(振替)東京八―八二―一八七

◆◆◆好評の新刊◆◆◆

真野龍海著

『仏の道 やさしい道』

(知恩院浄土宗学研究所シリーズ2)

◎理屈ではなく、わかる仏教——仏の教えへの導きの書として、さらにお念仏の信仰への教化の糧として、平易なことばでわかりやすく解説。

B六判・二三四ページ 定価 一三〇〇円

〈出版・発行〉

(株)東方出版 大阪市北区西天満三―二―四 電話(〇六) 三六五―五四二―
振替(大阪) 四―二〇五二二

*浄土宗出版室において特価(定価の一割引、一一七〇円)で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三三) 三四三六―三三五―まで。

第五十八巻

十一月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回 一日発行
平成四年十月二十五日印刷
平成四年十一月一日発行